

コラム -- ブラジル貧困地域の住民組織とコミュニティ図書館 (特集 開発途上国における図書館の役割と支援活動)

著者	加藤 真穂
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	126
ページ	32-32
発行年	2006-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005525



ディスカッション中のコミュニティ図書館
運営メンバー（2005年12月、筆者撮影）

〈コラム〉

ブラジル貧困地域の住 民組織とコミュニティ 図書館

加藤真穂

ブラジルでは公教育の普及を中心とする教育政策が一定の成果をあげ、識字率、就学率の増加がみられるものの、貧困層の子どもの留年・退学に起因した初等教育修了率の低さが問題としてあげられている。社会格差が著しい同国では、従来から社会運動が活発であり、貧困層の子どもを対象に社会・文化教育を実践するコミュニティ教育が地域住民の協力によって一九八〇年代から発展してきた。本稿では、筆者が二〇〇五年一二月に訪問したサンパウロ市郊外の貧困地域にある住民組織が運営するコミュニティ図書館を紹介する。

●住民組織と図書館設置の背景

サンパウロ市南東部にあるジャルデン・セレスチは、一九九〇年代初めに低所得者層向けの住民参加型住宅政策が実施された地域である。住宅問題運動を通じて連帯を深めた住民組織のジャルデン・セレスチ協会（AJC）が活発に活動しており、コミュニティ広場において、託児所運営や識字教育などの社会活動が地域住民の主導で実施されている。同地域では基本的な生活環

境が改善され、更なる生活向上や自己啓発の意識が高い住民が多く、自律的な学習の場としての図書館の重要性が認識されてきた。しかし、至近の市立図書館は、バスで二〇分程離れた場所にあり、地域住民がアクセスしにくい環境にあった。また、依然として同地域では、麻薬犯罪等に巻き込まれる青少年が多く、図書館を中心とした文化活動を活発化し、青少年教育の場としてゆきたいという願望が住民間にあった。

そこで、AJCは近隣に放置され、青少年の非行の拠点となっていた州政府の土地と建物をコミュニティ図書館として利用することを計画し、二〇〇四年に現地のローカルNGO（以降、IBEAC）に申請したところ承認され、IBEACによる土地建物の借上げ、及び光熱費等の資金支援を受け、AJCは同施設を図書館として運営できることとなった。

●「コミュニティ図書館（Biblioteca Comunitária Livro para que te quero）」

月額一レアル（約五〇円）を図書館の利料として設定しているが、読書及び自発的な学習習慣を地域住民、特に青少年に根付かせることを優先にしており料金徴収はあえて徹底していない。館外貸出しも行っており、利用者ファイルで利用料納入、貸出・返却状況を管理している。蔵書約三〇〇〇冊のうち五〇〇冊はIBEACからの

寄贈本、その他は活動の賛同者による個人寄贈であり、書籍は分野別に整然かつ見やすく配架されている。文化、芸術、歴史など人文系のもが多いが、法律関連の書籍も揃えている。AJCは人権意識高揚活動に力を入れており、人権に関する資料の割合が多いのが印象的であった。しかしながら、資金力がないため、利用対象者のニーズにあわせた書籍の選書・購入が行えていないのが残念なところである。

図書館設置のリーダーの青年は、ジャルデン・セレスチの貧困家庭で育ったが、住宅問題関連の住民運動への参加を通じて問題意識が高まり、先述のIBEAC主催の能力開発コースでコミュニティ活動のノウハウを学ぶとともに、難関といわれるサンパウロ大学に合格し、現在は教育学を専攻している。コミュニティ活動という公教育システムの外できっかけを得て自らのエンパワーメントを実現していき、知見を還元するかたちで率先して地域住民の生活向上に地道に取り組んでいる。このコミュニティ図書館が、次世代の青少年の健全な育成に寄与し、地域全体がより一層自律的かつ持続的に発展していくことを期待する。（かとう まほ／アジア経済研究所図書館）

《参考文献》

田村梨花「ブラジル都市貧困地域におけるコミュニティ教育」（『ラテンアメリカレポート』第一七巻第一号、二〇〇〇年）。